

Langland と Malvern

松 下 知 紀

0. はじめに

William Langland の『農夫ピアズ *Piers Plowman*』は社会派宗教詩として知られ、John Wyclif、Martin Luther などの宗教改革と同じ主張を含みながら、行動は異なり、Metaphysical poem として、文学作品として多層的な構成を示している。幻想詩の中を巡る巡礼は、時空の枠を解体し、アレゴリーの世界を構築してゆく。

Langland はキリスト教への回帰を念願するが、イギリス国内のキリスト教会の活動を批判し、改革だけではなく、ローマ・カトリック教を遡る、エルサレムのキリスト教の起源を模索する態度が伺える。すでに確立したキリスト教を布教するだけでは不十分で、自然の原理、社会の理想、人間の規範を追及して、古代キリスト教の原点に回帰することを根底に訴える。

本稿では、*Piers Plowman* の土着性に注目し、Langland の生誕の地 Malvern について、Great Malvern、Little Malvern と Hanley について述べる。次に、Langland のキリスト教の視点を古代キリスト教との接点で考察する。教会と国王の対立やペスト・貧困などの社会不安、中世社会に蔓延する諸問題を幻想の中で描写しながら、根底に潜む古代キリスト教への回帰願望をどのように捉えるかを考察する。さらに、現代に伝えられる Malvern で Langland の偉業を讃える Ledbury Poetry Festival などの活動について触れる。

I. Malvern

Malvern は Langland が生まれ、青春を過ごした土地である。*Encyclopaedia Britannica* (1883: XV, 346) において、Great Malvern は次のように記載されている。

MALVERN, Great, a watering-place of Worcestershire, England, beautifully situated on the eastern slope of the Malvern hills, 8 miles south-west by south of Worcester, and 120 north-west by west of London. The town is irregularly built, but there are many villas, and on account of its fine situation in the centre of the Chase of Malvern, its pure air, and its chalybeate and bituminous springs, it is much frequented by summer visitors. At Malvern a hermitage was endowed by Edward the Confessor, which after the Conquest was changed into a Benedictine priory. Of the buildings, which date from 1083, there still remain the abbey gate, and also the church (partly rebuilt in the reign of Henry VII., and restored since 1861), a very fine structure, Norman and Perpendicular, with square embattled tower. ... At Little Malvern, about 3 miles south of Great Malvern, there was a Benedictine priory, founded in 1171, upon the site of which the dwelling-house of Malvern Court has been erected, preserving the tower and chancel of the old priory church. At Malvern Wells, 2 miles south of Malvern, is the celebrated “Holy Well,” the water of which is of perfect purity.

I.1 Great Malvern

Katherine Wells の *Tour of Great Malvern Priory* (2006 : 2) において、Great Malvern Priory が 1085 年に Worcester 出身の修道士 Aldwin によって創建された、と記載されている。

Great Malvern Priory was founded in 1085 by a monk from Worcester

called Aldwin. According to the 12th century chronicler William of Malmesbury, Aldwin came to live in the forests of Malvern in the hope of establishing a monastic community here. ... With Wulstan's (Bishop of Worcester) support and a charter from William the Conqueror, Aldwin gathered together a group of perhaps 30 men and began to build the Norman Priory. The land they built on had been given by Edward the Confessor to his newly founded Westminster Abbey. This was the reason the monastery here became, under Westminster, a Benedictine Priory. (p. 2)



図 1 Malvern Hills 光景

Malvern の丘はなだらかな丘陵地であり、Langland の豊かな詩想を育む、自然に囲まれたその中に Great Malvern Priory と Little Malvern Priory が建っている。



図 2 Great Malvern Priory

Great Malvern Priory through the Centuries

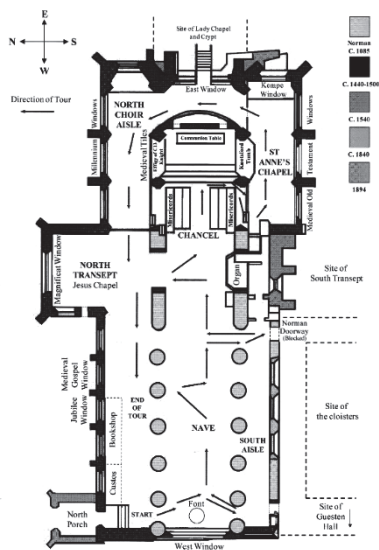


図 3 Great Malvern Priory の平面図, *Tour of Great Malvern Priory*

© Great Malvern Priory

1.2 *Piers Plowman* と Malvern

Piers Plowman には A, B, C, Z の版があり、それぞれ Malvern についての記述がある。Langland は Malvern Hills を自分の故郷として取り上げ、読者を幻想の世界へ誘ってゆく。

The A-Version

P,5 But on a May morwenyng on Maluerne Hilles

P,6 Me befel a ferly, of fairie me pouzte.

五月のある朝、モールヴァンの丘で、不思議なことが起こり、これは魔法の国の出来事ではないかと思った。

P,88 Thou migtest betere mete myst on Maluerne Hilles

P,89 þanne gete a ‘mom’ of here mouþ er mony be shewid!

まったく、モールヴァンの丘の霧を測った方がずっと容易であろう、金を見せられて、はじめて、やっと彼らの口からもれ出るもぐもぐはつきりしない言葉を聞くよりは。

8,129 Meteles and moneyles on Maluerne Hilles,

8,130 Musyng on þis metelis a myle wey I zede.

あたりを見廻すと、太陽は丁度そのとき南にあつて、私自身ひもじく金もなく、モールヴァンの丘にいたのだった。

B, C, Z テキストにも類似した表現が含まれる。

The B-Version

P,5 Ac on a May morwenyng on Maluerne Hilles

7,142 Meteles and moneilees on Maluerne Hilles,

The C-Version

P,6 Ac on a May morning on Maluerne Hilles

P,163 Thow myghtest betre meten myst on Maluerne Hilles

5,110 Of the matere þat me mette furste on Maluerne Hulles.

9,295 Meteles and moneyles on Maluerne Hulles,

The Z-Version

P,6 Ac in a May morwen vnder Maluerne Hylles



図4 Malvern の森の山道

Langland の述べる小川、水辺、せせらぎは Malvern Hills の至る所に見られ、詩人の詩情をかき立てたのだろう。

A: P,8 Vndir a brood bank be a bourne side;

A: P,9 And as I lay and lenide and lokide on þe watris,

A: P,10 I slomeride into a slepyng, it swizede so merye.

とある小川のそばの広い斜面で(休むことにした)。横になって水の面を見ているうちに、ぐっすり寝込んでしまったが、それほどせせらぎの音は心地よかった。

1.3 Hanley Castle

Langland が学んだ Little Malvern Priory から徒歩または馬で行ける

Hanley Castle は 13 世紀初めから荘園が開かれ、14 世紀前半には教会付属小聖堂が建設されていた。



図 5 Hanley Castle Church

Hanley Castle に関する掲示板によると、Hanley は中世期に重要な地位を占めたと考えられる、王の城だった。Hanley には塚 (Mound) があり、以前大きな城壁の濠に囲われていた。Worcester から Upton に至る高い道路を見下ろす王の城は、たぶん 1207 年から 1212 年の間ジョン王によって建設された。Pipe Rolls には Hanley に国王の館に金が費やされたとの言及がある。1214 年にこの荘園が Geoffrey de Mandeville に与えられ、その管理が 1216 年に Roger Clifford に与えられた。国王 Henry III がそれを Gilbert de Clare に与えた。その城は国王 Edward II によって征服されるまで、その家族に留まった。1322 年にそれが反乱期に攻撃され、燃やされた。しかし、1322 年と 1327 年の間主要な建設事業が行われ、付属礼拝堂が含まれる。城の掘削に千人の掘削者がいたという記録がある。1416 年には食料品貯蔵室 (Buttery) と食器室 (Pantry) 付の二つの石の塔がついた広間の端に大きな部屋と二つの客室があった。南側に三つの塔と南端に一つあった。さらに、製パン室、台所、矢来 (柵)、濠と付属礼拝堂の言及がある。このことから石造の城だと

暗示する。1418年に引き橋、水たまりと水車の言及がある。正方形の天守閣（本丸）は北西の端にあり、濠により囲まれていた。

Langland は幼少期より Little Malvern Priory からほど近い Hanley Castle を訪れ、『農夫ピアズ』の中に登場する tour（塔）と dungeoun（土牢）を知り、作品に使用したと考えられる。

A.Pr.11 Panne gan [me] mete a merueillous sweuene ---

A.Pr.12 Pat I was in a wilderness, wiste I neuere where.

A.Pr.13 Ac as I beheld into þe est an heiȝ to þe sonne,

A.Pr.14 I saiȝ tour on a toft triȝely imakid,

A.Pr.15 A dep dale beneþe, a dungeoun þereinne,

A.Pr.16 Wiþ depe dikes and derke and dredful of siȝte.

それから私は驚くべき夢を見たのだった。どこかわからないが、ある荒野の中にいたのだ。東のかた、天の太陽の方角を見やると、丘の上に見事な造りの塔が見えた。その下には底深い谷間があり、そこに深く暗い見るも恐ろしい掘割をめぐらした城塞（土牢）があった。

Hanley Castle は Langland 当時の面影は失われているが、この詩人にとって、*Piers Plowman* の舞台として重要な役割を果たしたことが分かる。

1.4 Little Malvern Priory

Little Malvern Priory に掲げられた歴代小修道院長のリストには、1171年の Jocelin & Edred から 1529 年の John Bristowe の名前が記されている。最後に、Henry VIII により 1537 年にこの Priory が解散させられた旨、記されている。このことから Langland が活躍した 14 世紀後半にこの小修道院が宗教活動を行っていたことが分かる。

Jocelin & Edred 1171; Richard, Died 1260; William de Broadway, Appointed 1269; John de Shockey, Occurs 1274 & 1272, Resigned 1280; John de Coleville or Colewell, Appointed 1280, Resigned 1286; John de Vigornia, Appointed 1287, Died 1299; John de Dombleton, Appointed 1299, Resigned 1300; William de Molendinis or Mills, Appointed 1300-1, Resigned 1303; Roger de Pirie or Pyribrok, Appointed 1303, Resigned 1326; Hugh de Pyribrok, Appointed 1326, Died 1360; Henry de Staunton, Appointed 1360, Died 1369; John de Wigornia, Appointed 1369; Richard de Wenlock, Occurs 1378, Resigned 1392; Richard Brewer, Appointed 1392; William Brewer, Occurs 1435; John Estnor, Occurs 1445; John Element, Occurs 1462; John Wyttesham, Resigned 1480; Henry Morton, Appointed 1480, Resigned 1484; Thomas Coleman, Appointed 1484; John Bristowe, Occurs 1529. The Priory was dissolved by Henry VIII in 1537.

Little Malvern Priory の掲示板によると、Little Malvern Priory はノルマン期に遡り、1125 年に最初の記録があり、Worcester の Benedictine Abbey に関わっていた。1282 年に Bishop Gifford がこの教会を St. Mary, St. Giles, St. John the Evangelist に献呈した。1323 年に Bishop Cobham が日常生活に忍び込んだある悪習慣を責めて僧侶たちに手紙を送った。1480 年に Bishop Alcock が教会の大規模な崩壊を見つけた。Bishop Alcock は国王 Edward IV の二人の皇子の教師であり、Royal Council の会長だった。

William Langland は 14 世紀の詩人でこの地で教育を受けて、隣接する丘から有名な『農夫ピアズ』の靈感を享けた。



図 6 Little Malvern Priory

Little Malvern Priory は 12 世紀から 15 世紀にかけて建設されている。

Gwen Appleby による William Langland の掲示板によると、William Langland は 1332 年に Malvern Chase で生まれた。彼の父は地位のある人物で、Hanley Chase から Chase を治めた、Hugh Despencer the Younger, Lord of Malvern Chase の友人だった。彼の母については何も知られていない。

Langland は Malvern 地区周囲の美しさの中で育った。彼の父と友人たちが資金を出して彼を Little Malvern Priory で学ばせた。そこで彼は幸福と満足を見つけ、大きな将来性が約束されるはずだった。17 歳のころ黒死病のために、小さな修道会で僧侶になった。ロンドンに出て、Cornhill で貧しく過ごし、結婚した。教会で昇進することが無くなり、死者の魂ために祈願してわずかな生計を立てた。しかし、Chaucer の同時代人として中世英文学を代表する人物になった。Langland はいかなる形式の墮落にも辛辣な批判をするとともに、教会と国王にしっかりとした忠誠心を持った。彼は貧しい者たちや抑圧された者たちに優しい視線を向け、150 年後の修道院の解体を予言する驚くほどの先見を持っていた。

Langland は Malvern Hills の息を呑むほどの美しさを生き生きと思い出したように思われる。彼は West Midland 方言で、深く感じた確信を説明するために、一地方のイメージを使って詩を書いた。彼の詩は一連の夢と覚醒の合間（Interlude）から成る。それぞれの夢は関連性がなく、奇妙である。夢の土地を彷徨う、彼の長い旅は、この地上の生活の意味を精神的に解明することである。彼はついに同じ崩壊した、変わらぬ世界に目覚める。



図 7 Little Malvern Priory の入口の看板

Little Malvern Priory は Langland と深い関わりがあることが知られており、この小修道院の歴史を辿ることによって、*Piers Plowman* の作品構成との関連を確認することができる。

II. Langland と宗教改革

John Wyclif (1320/30-1384) はイングランドの神学者で、宗教改革の先駆者として知られ、聖書をキリスト教の教義の唯一の究極の原点と見做した。『新カトリック大事典』(I: 616-17) によれば、『存在論大全』において、唯名論に真っ向から反対する極端な実在論を支持している。神学において、ロー

マ教皇の首位権、修道会、免償、聖職者の富を非難し、当時の墮落した教皇、司教、司祭たちがあらゆる権能を失っていることを主張。君主に教会を改革する権利があると述べ、救いに予定された信仰篤い人々から成り立っている教会を真の教会と見做した。

また、Martin Luther (1483-1546)は、エルフルトのアウグスチノ会修道院に入り、司祭に叙階された。宗教改革の観点から、『新カトリック大事典』(IV: 1331-33)によれば、初代教会の三位一体やキリスト論の教理を受容しながら、「キリストの救いの働き」に関心が集中していくのも当然のことであって、十字架と復活のキリストへの注目が、「我々の神学は十字架の神学である」といわしめることにもなった。その神学の関心事はこのキリストにあって「罪の、滅び行く人間と、義とし、救う神」との関係にかかわることになる。

Langland も宗教改革の理念と深く結びついているが、その主張は頭韻詩によるアレゴリー幻想の世界で語られる。

III. 『農夫ピアズ』と古代キリスト教

Langland の出生地の Malvern は *Piers Plowman* と深く関わりあっているが、Langland の思想にはキリスト教の根源が探られなければならない。Langland は幻想の中の巡礼に時空を解体して、古代キリスト教へ回帰することにより、キリスト教の基盤となる理念の重要性を探ろうとする。＜真理＞、＜恩寵＞、＜統一＞などが必要なことを力説する。

A テキスト第 5 歌において、聖ヤコボやローマ諸聖人への中世の巡礼より聖＜真理＞の追究が大切だと Langland は主張する。

A.5.40 And ȝe þat seke Seint Iame and seintes of Rome,

A.5.41 Sekiþ Seint Truþe, for he may saue ȝou alle.

A.5.42 { Qui cum Patre et Filio } --- that faire mote ȝow befallle.'

「聖ヤコブやローマの聖人たちの巡礼に訪れるあなた方よ、＜聖真理＞を訪れなさい。というのは、彼があなた方すべてを救えるからです。

《父と子とともにおわすお方》——幸運があなたがたにありますよ

うに。

また、実体のない存在として、キリストの創造物でありながら、舌も歯もない生き物が登場する。その実体は、《霊》、《心》、《思考》、《記憶》、《理性・リーズン》、《感覚》、＜良心＞、《愛・アモール》、《魂》のように多面性を持つ。

B.15.13 Oon wiþouten tonge and teep 舌も歯もない生き物

B.15.16 'I am Cristes creature,' quod he 'and Cristene in many a place,

B.15.17 In Cristes court yknowe wel, and of his kyn a party.

「私はキリストの創造物。キリスト教徒ならたいがい、私がキリストの館にいて、いささかその血をひくことも知っているはず。

B テキスト第 16 歌では、キリストが木曜日に捕らえられ、金曜日にエルサレムのカルヴァリオの丘の十字架上で殺されたことを述べ、中世の記述から古代キリスト教の世界へと回帰している。

B.16.160 In a Þurday in þesternesse þus was he taken

B.16.161 Thoru₃ Iudas and Iewes --- Iesus was his name

B.16.162 That on the Friday folwyng for mankynde sake

B.16.163 Iusted in Ierusalem, a ioye to vs alle.

B.16.164 On cros vpon Caluarie Crist took þe bataille

B.16.165 Ayeins deef and þe deuyl, destroyed hir boþeres myȝtes ---

B.16.166 Deide, and deef forbide, and day of nyȝt made.

木曜日、日暮れてユダとユダヤ人により、彼は捕らえた。その名はイエズスであった。その翌日の金曜日、人類のために、エルサレムで刺され給うたが、それはわれらすべてに喜びをもたらすためであった。カルヴァリオの丘の上の十字架上で、キリストは戦い、その死によって、死に打ち勝ち、夜を昼に変え給うた。

また、B テキスト第 17 歌でも、エルサレムへの道案内を＜信仰＞がしている。

B.17.113 ‘And þanne shal Feiþ be forster here and in þis fryþ walke,

B.17.114 And kennen out comune men þat knowen noȝt þe contree,

B.17.115 Which is þe wey þat I wente, and wher forþ to Ierusalem;

そして、信仰が森林官としてこの森を巡視し、地理不案内の一般人に、私が歩いた道と、エルサレムへの道を教えるのだ。

第 18 歌に入ると、エルサレムにキリストが入り、槍試合をする旨が＜信仰＞により語られる。

B.18.17 Olde Iewes of Ierusalem for ioye þei songen,

B.18.17a { Benedictus qui venit in nomine Domini. }

エルサレムの昔のユダヤ人たちは喜びを唱和した。

《賛美されよ。主のみ名によって来たる者。》

B.18.18 Thanne I frayed at Feiþ what al þat fare bymente,

B.18.19 And who sholde iuste in Ierusalem, ‘Iesus,’ he seide,

そこで私は信仰に尋ねた。このできごとは、いったい何か、
また、誰がエルサレムで試合をするのか。彼は言った。「イエズスだ。



図8 ベツレヘム降誕教会（イエスが生まれた洞窟の上に建つ教会）

『図説イエス・キリスト』© 河出書房新社

さらに、高貴なイエズスはピアズの紋章を帯び、《人間の資質》で身を固めた。
《神そのもの》だと誰も気づいていない。

- B.18.22 'This Iesus of his gentries wol iuste in Piers armes,
B.18.23 In his helm and in his habergeon { humana natura }.
B.18.24 That Crist be nogt biknowe here for { consummates Deus, }
B.18.25 In Piers paltok þe Plowman þis prikiere shal ryde;
B.18.26 For no dynt shal hym dere as { in deitate Patris. }

「この高貴な生まれのイエズスは、ピアズの紋章を帯び、その鎧や冑、つまり《人間の資質》で身を固め 戦いに臨もうとしている。だから、誰もキリストが《神そのもの》であるとは気づかない。」

B テキストの第 19 歌では、農夫ピアズと主イエスを同一視し、中世の一農夫の耕作が人間救済の根幹である主イエスと一体化している。

B.19.6 That Piers þe Plowman was paynted al bloody,

B.19.7 And com in wiþ a cros bifore þe comune peple,

B.19.8 And rigt lik in alle lymes to Oure Lord Iesu.

農夫ピアズが、全身血まみれの姿で、十字架を背負い、人々の前に現れたが、その姿は、まさにそのまま、われらの主イエスであった。

次に、キリストの使者として＜恩寵＞を登場させ、農夫ピアズとともに民衆を助ける。

B.19.208 Quod Conscience, and knelede, 'This is Cristes messenger,

B.19.209 And comeþ fro þe grete God --- Grace is his name.

良心は、ひざまずいて言った。「これは、キリストのみ使い、大いなる神より遣わされたもので、その名は＜恩寵＞である。

B.19.214 And þanne bigan Grace to go wiþ Piers Plowman,

B.19.215 And conseillede hym and Conscience þe comune to sompne:

それで＜恩寵＞は農夫ピアズとともにあることとなったが、彼は、ピアズと良心に民衆を呼び集めるように命じた。――

キリストの使者である＜恩寵＞は農夫ピアズとともに＜信仰上の耕作＞を開始する。そこに登場するのは、新約聖書に出てくるルカ、マルコ、マテオとヨハネである。

B.19.264 Grace gaf Piers a teeme --- foure grete oxen.

(Luke, Marke, Matthew, and Iohan)

＜恩寵＞は、ピアズに大牛四頭立ての犁組を与えた。

(ルカ、マルコ、マテオ、ヨハネ)

また、＜恩寵＞がピアズに贈った4頭の馬は、4聖人アウグスチヌス、アンブロシウス、グレゴリウスとジェロームであった。

B.19.269 And yit Grace of his goodnesse gaf Piers foure stottes ---

(Austyne, Ambrose, Gregori, Ierome)

<恩寵>は、慈愛によって、ピアズに四頭の馬を与えたが、
(アウグスチヌス、アムブロシウス、グレゴリウス、ジェローム)

さらに、<恩寵>は旧約聖書と新約聖書というまぐわを農夫ピアズに与える
ことにより、中世社会においても教会制度に関わりなく、直接キリスト教に
接することの大切さを説いている。

B.19.275 Wip two aipes þat þei hadde, an oold and a newe,

B.19.275a { Id est, Vetus Testamentum et Nouum. }

古いのと新しいのと、二つのまぐわでならず。

《すなわち、旧約聖書と新約聖書。》

<恩寵>は人々の生命を維持するのに四<枢要徳>を穀物として与える。

B.19.276 And Grace gaf Piers greynes --- cardynales vertues, ({Spiritus
Prudencie }, { Spiritus Temperancie }, { Spiritus Fortitudinis },
{ Spiritus Iusticie })

また、<恩寵>は、<枢要徳>という穀粒を与え 《〈思慮深い心〉、
《節度ある心〉、《強い心〉、《正義の心〉》

<自然>が伝える大切な言葉は<愛>であり、<痛悔>と<告白>を経る遍
歴によって望ましいキリスト教会<統一>に辿り着けると力説する。

B.20.208 ‘Lerne to loue,’ quod Kynde ‘and leel alle opere.’

自然は答えた。「愛することを学ぶのだ。ほかのことはどうでもい
い。」

B.20.210 ‘And þow loue lelly, lakke shal þee neuere

B.20.211 Weede ne worldly mete, while þi lif lastep.’

B.20.212 ʒThoruȝ Contricion and Confession til I cam to Vnitee.

B.20.213 And þere was Conscience conestable, Cristene to saue,

彼は言った。「真実に愛するならば、お前は決して生きている間、食べ物や着るものに困ることはないぞ。」それで私は、＜自然＞の教えに従って遍歴をはじめ、＜痛悔＞と＜告白＞を通して＜統一＞に行きついた。

聖教会＜統一＞はその材質が、＜クリストの血＞による土台、＜苦痛＞と＜受難＞による壁、＜聖書＞による屋根で葺かれていた。これは、中世キリスト教会を解体して、古代キリスト教の教会として再建することを祈願している。

B.19.324 And Grace gaf hym þe cros, wiþ þe croune of þornes,

B.19.325 That Crist vpon Caluarie for mankynde on pyned;

B.19.326 And of his baptisme and blood þat he bledde on roode

B.19.327 He made a manere morter, and mercy it highte.

B.19.328 And þerwiþ Grace bigan to make a good foundement,

B.19.329 And watlede it and walled it wiþ hise peynes and his passion,

B.19.330 And of al Holy Writ he made a roof after,

B.19.331 And called þat hous Vnite --- Holy Chirche on Englissh.

B.19.332 And whan þis dede was doon, Grace deuyssede

B.19.333 A cart highte Cristendome, to carie [home] Piers sheues,

すると＜恩寵＞は、十字架を荊の冠とともに与えたが、それは、クリストがカルヴァリオの丘で人類のために血を流し給うた時のもの。また、その洗礼とその十字架上に流した血で、モルタルのようなものを作ったが、それは＜慈悲＞と言う名であった。この材料で、＜恩寵＞は堅固な土台を造り、その＜苦痛＞と＜受難＞で壁を組み、塗り上げて、そのあと、＜聖書＞で屋根を葺きあげ、この家を＜統一＞と名づけたが、英語で言えば＜聖教会＞である。作業が終わった時、＜恩寵＞が考案したのは、一台の車。＜クリ

スト教信仰」という名で、ピアズの刈束を運ぶもの。

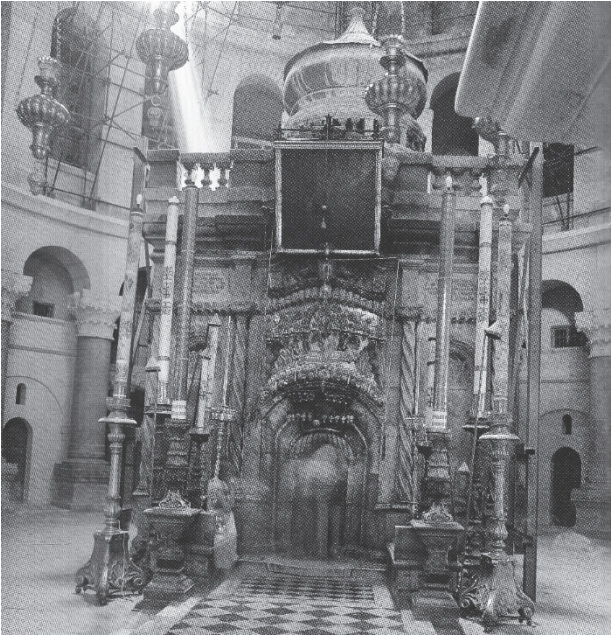


図 9 聖墳墓教会・ゴルゴダの丘（イエスの遺体が埋葬された墓を含む）

『図説イエス・キリスト』© 河出書房新社

Langland は Piers を Anglicized Christ と見做して、中世のイギリス人読者に分りやすい形で幻想を利用した頭韻詩を創作した。

IV. 現代の Malvern に語り継がれた *Piers Plowman*

現代に語り継がれた *Piers Plowman* は現代イギリスに息づいているが、とりわけ、Langland の出生地である Malvern には絵画、翻訳、演劇に活動が見られる。

先ず、絵画は Alys L. Woodman による ‘A Fair Field Full of Folk---All Manner of Men’ (1894) が Malvern National Trust に掲示されている。

Peter Sutton 氏は Malvern に在住し、*Piers Plowman: The B-Version* を

現代英語に翻訳している。



図 10 Peter Sutton 氏 : *Piers Plowman: The B-Version* の現代英語訳を出版

Ledbury Poetry Festival が 2017 年 6 月 30 日から 7 月 1 日まで行われた。6 月 30 日夜 8 時から 10 時まで Malvern Hills を登り、‘Will’s Vision’ が屋外で上演された。また、7 月 1 日には Ledbury で行われた。St Michael & All Angels で ‘The Marriage of Lady Mede’ 上演され、Barrett Browning Institute で ‘The Confession of the Seven Sins’ と ‘The Ploughing of the Half-Acre’ が上演された。また、St Katherine’s Hall で ‘The Tower of Truth’ が上演された。次の写真は St Michael & All Angels に入場する出演者たち。



図 11 Ledbury Poetry Festival. 2017.7.1

V. まとめ

Langland は故郷の Malvern Hills を *Piers Plowman* の舞台として設定した。さらに、幻夢の中で古代キリスト教の実現を熱望して、複合的アレゴリーを活用した。*Piers Plowman* は中世英文学の中でも特異な位置を占めるが、Guillaume de Deguileville の *Le Pèlerinage de Vie Humaine* や Huon de Méry の *Li Tornoimenz Antecrit* などの中世フランス文学も詩人は取り入れて、独創的な幻想詩を創作した。

* 本稿は平成 27 年度専修大学長期在外研究の研究計画「中世英文学に影響を及ぼしたイタリア・ルネッサンス」に基づく研究である。本稿における *Piers Plowman* の引用は A.V.C. Schmidt 編により、A テキストの日本語訳は池上忠弘訳、B テキストの日本語訳は柴田忠作訳による。

参考文献

- Fraser, Maxwell. *Companion into Worcestershire*. London: Methuen & Co. 1949.
- 河谷龍彦『図説イエス・キリスト』河出書房新社、2008.
- W. ラングランド『農夫ピアースの夢』柴田忠作訳、東海大学出版会、1981.
- W. ラングランド『農夫ピアースの幻想』池上忠弘訳、中央公論社、1993.
- Schmidt, A.V.C. ed. *William Langland: Piers Plowman*. 2 vols. Kalamazoo, MI: Medieval Institute Publications, Western Michigan University, 2011.
- Encyclopaedia Britannica*. Edinburgh: Adam and Charles Black, 1883.
- Sutton, Peter. “Piers Plowman – Elgar’s Bible”, *Elgar Society Journal*, vol. 20, No. 2. 3-17, 2017.
- Sutton, Peter. trans. *Piers Plowman*. Jefferson, NC: McFarland & Co. 2014.
- Wells, Katherine. *Tour of Great Malvern Priory*. The Friends of Great Malvern Priory, 2006.
- 新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』全4巻、研究社、1996－2009.